

# 五輪開催都市リオの変容

浜口 伸明

二〇一〇年に行われた人口センサスによると、リオデジャネイロ市（以下、リオ）の人口は六三二万人であり、二〇〇〇年の人口センサス後、一〇年間で四六万人（八％）増加した。地理統計院は、二〇一五年のリオの人口を六四七万人、周辺自治体を含む大都市圏の人口規模は一二八〇万人に達すると推計している。

一七六三年から内陸に計画都市ブラジリアが建設された一九六〇年まで、リオはブラジルの首都であり、植民地時代にはナポレオン軍の侵略から逃れたポルトガル王室が居を構えて、ポルトガル王国の中心であったこともあった。このため、リオの都市インフラは国内のほかの都市に先んじて整備されてきた。その一例は、高台から市街地に水を供給する目的で一八世紀半ばに建設されたラパの水道

橋である。現在この水道橋の上を路面電車が走り、観光名所になっている。

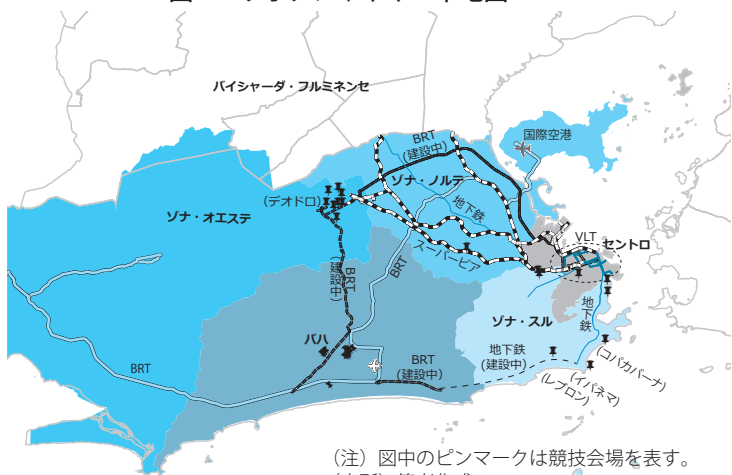
首都が移転した後もリオはブラジルの政治、経済、文化の中心であり続けている。地理統計院、国立経済開発銀行、石油公社（ペトロbras）などの重要な政府機関は今でもリオに拠点を置いている。産業はサンパウロを中心に発展しているが、こと資源・インフラ関連に関してはリオが中心である。多くのテレビ番組、音楽、小説、映画がリオから発信され、ブラジル人のライフスタイルに大きな影響力を持っている。

## ●リオのなりたち

独立後、二〇世紀初めに大規模な都市計画が行われ、港湾部のマウアー広場とグロリア海岸を結ぶセントラル大通り（現在のリオブ

ランコ大通り）とグロリア海岸のベイラ・マール大通りが建設された。中心市街地セントロ地区の骨格ができた。海沿いでは住宅地がセントロから南に向かって伸びた。コパカバーナ海岸へのアクセスを妨げていた岩山にはトンネルが開通し、四キロ以上続く美しいビーチに面した住宅地が形成された。こうして、現在ゾナ・スル（南地区）と称される中高所得世帯の居住地域が形成された（図1参照）。背後に山が迫っているリオでは、環境が良い南部の海沿いの平地は狭小である。このためゾナ・スルでは、早くから住宅の高層化が進んだ。同時に、より良い環境を求めてゾナ・スルの住宅地は外に広がり、イパネマ、レブロン海岸およびロドリゴ・デ・フレイタス湖周辺では比較的新しい高層マンションが立ち並んでいる。

図1 リオデジャネイロ市地図



（注）図中のピンマークは競技会場を表す。  
（出所）筆者作成。

二〇一〇年時点でゾナ・スルの人口は約一〇〇万人にのぼり、居住地域としてのみならず、セントロと並ぶビジネス拠点としても成長した。ポンデアスカル（砂糖パンの岩山）やキリスト像があるコルコバードの丘をはじめとする観光資源が集中し、グルメ、ショッピングの中心でもある。

ゾナ・スルの南西で近年急速に住宅開発が進むのが、今回五輪のメイン会場になるバハ地区だ。バハ地区の二〇一〇年の人口は六八万人だったが、二〇〇〇年から二〇一〇年の間のリオ市の人口

増の半分（二三万人）は、ここバハ地区でみられたものだ。

鉄道が通じていないバハ地区はセントロへのアクセスが悪く、交通渋滞がひどければ、片道三〇キロの通勤が一時半を超え、車を覚悟しなければならぬ。年々車の量が増えているリオでは、交通渋滞は悪化の一途をたどっている。

### ●分断された都市リオ

一方、都市の発展にともなって工場は北へ移動し、市内で最も多い二四〇万人が暮らす大衆居住地域ゾナ・ノルテ（北地区）を形成した。ここには貧しいブラジル北東部内陸の農村地帯からの移住民も多く生活し、セントロとゾナ・

スルに労働力を供給している。大衆居住地域は西地区ゾナ・オエステにさらに拡大し、この地区の人口は二〇〇年から二〇一〇年の間に一五万人増加して一七〇万人に達した。ゾナ・ノルテの市の境界の先の北方には約三一〇万人が暮らすバイシャーダ・フルミネンセ地域と総称されるいくつかの周辺自治体がある。

ゾナ・スルやバハと違って、大衆居住地域には公園、緑地やスポ

ーツや文化を楽しむ公共財が不足しており、住環境のアメニティは低い。国内外から一〇〇万人の観光客を集めて毎年二月あるいは三月に開催される有名なリオのカーニバルは、この地域の各地区を代表するサンバチーム（エスコラー・デ・サンバ）が、この時だけリオの主役として輝く瞬間だ。

郊外鉄道スーパードリアや地下鉄、路線バスを乗り継いで、ゾナ・ノルテ、バイシャーダ、ゾナ・オエステから平日は一〇〇万人以上の労働者・学生がセントロとゾナ・スルに流入する。朝夕に激しく混雑する公共交通を長時間乗り継がなければならぬ彼らの通勤も大きな苦痛をとまづっている。

リオでは、生活水準が高いゾナ・スル、バハの住宅地と外縁の大衆居住地域の間にこのように地図上に観察される所得階層の水平的な分断がある。このこととともに、ゾナ・スルのなかでも海岸の高級マンション群と丘陵（モホ）を占拠しているスラム（ファヴェーラ）の間には、低地と高台の垂直的な分断も存在する。人口センサスに基づく地理統計院の調査によると、リオ市内でファヴェーラに住んでいるのは一三九万人。リオを上回

る一二二万人の人口を擁する大都市であるサンパウロのファヴェーラ人口は一二八万人であるから、リオではその比率が高いことがわかる。

ファヴェーラの住民の多くはふつうの労働者階層であるが、モホを実効支配している麻薬マフィアの抗争や影響を受けてギャング化した少年の犯罪はファヴェーラのなかにとどまらず、それらと背中合わせで生活するゾナ・スルの住民や観光客が被害に巻き込まれる事件が日々発生している。

水平・垂直に分断した社会の状況は悪化の一途をたどっている。生活圏は仕事から遠くなり、通勤は金銭的に負担で混雑もひどい。麻薬、銃、暴力の暗い影は人々を脅かし、安全への不安が社会の調和を蝕んでいる。このような問題がリオに住む人々にストレスと不信感を募らせているのだ。五輪・パラリンピックはひとときの国際スポーツイベントにとどまらず、その遺産（レガシー）が、リオが抱えるこのような問題の改善に貢献するようにデザインされた。期待された成果が得られるならば、同じような悩みを抱えるラテンアメリカの大都市にも希望を与える

ことになるだろう。

### ●競技施設

今回メイン会場が設置されるバハでは、選手村や報道センターが開設されるほか、陸上、自転車、バスケット、柔道、レスリング、フェンシング、テコンドー、ハンドボール、体操、新体操、トランポリン、シンクロナイズドスイミング、水球、飛び込み、テニス、水泳、重量挙げ、卓球、バドミントン、ボクシング、の各競技を実施するスポーツコンプレックスが建設された。リオ五輪で初めて採用されたゴルフのためのコースも新たに作られた。「未来のアリーナ」と名付けられたハンドボール会場は大会後に解体され、四校分の学校建設の建材として再利用されるなど、無用の長物を作り出さない工夫もされている。

セントロとゾナ・ノルテでは、二〇一四年サッカーワールドカップに合わせて改修されたマラカナン・スタジアムで開会式、閉会式、サッカーが、隣接する体育館でバレーボールが実施されるほか、五輪に合わせて改修されたエンジェニオン・スタジアムでサッカーと陸上競技が行われる。カーニバル

のサンバ・パレードの会場であるサンボドロモを、アーチェリー会場や陸上競技マラソンのゴールに予定したのはりおらしい工夫といえる。なお、サッカーの予選はりお以外の都市（マナウス、ブラジリア、サルバドル、ベロオリゾンテ、サンパウロ）でも開催される。日本チームも予選リーグを戦う最も遠いマナウスまでは直行便でも四時間、乗り継ぎ便であれば五時間以上かかる。

ゾナ・スルでは、自転車、トライアスロン、ビーチバレー、カヌー、ボート、ヨット、競歩が実施される。美しい風景が活かされるが、長年の生活排水で汚染された海や湖の水質が問題視されている。

ゾナ・オエステのデオドロ地区にはサブ会場が建設され、近代五種競技、バスケットボール、乗馬、ホッケー、射撃、ラグビー、マウンテンバイク、BMX、スラロームカヌーが開催される。一部は二〇〇七年に開催されたパンアメリカン大会のときに軍用地内の施設を利用して建設した施設を利用している。デオドロはゾナ・ノルテやバイシャーダとの交通の連結点でもあり、この施設が地域に欠けていた生活アメニティを高める

スポーツ・リクリエーションのための公共財として活用されていくことが望まれている。

## ●モビリティを高める公共交通

五輪・パラリンピックの競技会場が市内各地に分散されていることから、モビリティを確保する必要がある。この点にりお、リオデジャネイロ州は重点的な投資を行ってきた。大会後に前述のような水平的分断を緩和する効果が期待できるからだ。

筆者がりおに滞在した二〇一五年二月から五月頃、セントロでは車の交通を大幅に制限し、路面電車（ライト・レイル鉄道：VLT）の建設が進められていた。導入されるVLTはフランス製の超低床型で、車両の上に架線がなく線路から電源を取る方式のみた目もすっきりしたものである。VLTの経路は、国内線航空専用のサントス・ドゥモン空港、地下鉄駅、スーパービアのターミナルであるセントラル駅、対岸のニテロイ市と結ぶ連絡船発着場のキンゼ広場、長距離バスターミナルを通り、これまでつながりがなかった公共交通を結ぶ役割を果たす。中心市街

地のバス運行量を減少させることができ、交通渋滞を緩和する効果も期待できる。それとともに、市民劇場や国立図書館があるシネラジア、カリオカ広場の商業集積、リオブランコ大通りのオフィス街、カンデラリア教会、といったセントロの主要スポットを経て、港湾地区の再開発の目玉として新装オープンしたリオデジャネイロ美術館（MAR）と五〇年先の地球環境と都市をテーマにした「明日の博物館」を中心に拡張されたマウアー広場、七月にオープンが予定されている南米最大の水族館AquaRio、エスコラー・ジ・サンバのショーがみられるシダーヂ・ド・サンバ、などを巡って、市民の娯楽と観光の足の役割を果たすことも期待されている。

リオの経済が一九八〇年代以降沈滞してセントロの治安が悪化したのにもない、訪れる観光客がナイトライフを楽しむのはゾナ・スルのコパカバーナ地区やイパネマ地区などに限定され、夜間・週末のセントロは閑散として近寄りたくなった。VLTの敷設とセントロと港湾地区の新たな車の動線としてすでに開通した市制四五〇年記念トンネルの効果が相



写真1 セントロ地区に導入されるVLT。2016年4月下旬時点で試験走行が行われていた（撮影：近田亮平）

まって、荒廃した港湾地区の再開発がりおの再生のシンボルになるかもしれない。先行例は、セントロ西部に芸術家が集うボヘミアンな雰囲気のパバ地区だ。過去一〇年余りの間で治安が回復して凋落から回復し、レストラン、バル、ライブハウスに毎夜多くの住民や観光客が詰めかけて、今やイパネマ、コパカバーナを凌ぐ賑わいを見せている。リオが、人々がより気楽に出歩ける都市になっていく期待が高まっている。

五輪のメイン会場が設置される





写真2 バハ地区に建設された連節バス BRT トランスカリオカ線のアルボラダ・ターミナル駅（撮影：近田亮平）

バハ地区は五輪・パラリンピックを機に公共交通が整備されゾナ・スル、セントロとの統合が進みそうだ。人口増加が著しいが、事業所があまり立地していないバハは生活するだけの街として発展し、バス以外の公共交通機関がなかったこともあって、住民は長距離の車通勤を余儀なくされてきた。バハとゾナ・スル間の自動車交通の隘路となってきたサンコンハード海岸の高架道路の拡張工事が五輪までの開通を目指して進められているほか、現在イパネマが終点となっている地下鉄一号線と接続して西に延びる地下鉄四号線が開通すれば、バハの東の端に達し、そ

こからバハの中心にあるアルヴォラダ・バスターミナルまで専用レーンバス（BRT）で結ばれる。アルヴォラダ・バスターミナルとガレオン国際空港の間を結ぶBRT トランスカリオカ線はすでに開通している。

競技の一部が大衆居住地域にあるデオドロで開催されることにも注目したい。この地域の人々の苦しい通勤通学事情についてはすでに述べたとおりだが、それには市内に何カ所も岩山があつて交通を遮断しているリオ独特の地形が影響を与えている。海岸から離れた大衆居住地域とバハの間にも大きな岩山があつて直接の交通を阻んでいる。セントロを経由して公共交通機関で移動すると二時間以上かかるため通勤するのは不可能である。リオ市はバハとデオドロをトンネルで結ぶBRT トランスオリンピカ線を設置して、イベント中の観客のモビリティを提供しようとしているが、これが将来通勤者の足として機能すれば両地区間の移動時間が劇的に短縮される。これにより労働力供給が可能になれば、商業・業務地区としてのバハ地区の発展の可能性が高まるだろう。大衆居住地域の住民にとつ

ては雇用の機会が増加するし、バハ住民はバハ地区内で働けるようになれば長距離自動車通勤から解放されることになる。

### ●残された課題

このように、五輪・パラリンピックの遺産にはリオの社会的分断状況を緩和する効果が期待できる。しかし、四月二日にゾナ・スルの海岸通りに新たに建設されたサイクリング道路の一部が高波により開通後わずか三カ月で崩壊し、死者を出すショッキングな事故が発生した。設計上の安全基準に問題があつたことが指摘され、突貫工事で進められる一連のインフラ整備全体への懸念をもたらしした。

五輪・パラリンピックの遺産を活用するためには継続的な投資が必要である。リオデジャネイロ州政府は財政収入において沖合海底油田開発のロイヤルティへの依存を強めてきた。最近のペトロブラス汚職事件の影響を受けた投資削減と原油価格の低下は州の財政を直撃しており、リオ市を含めた地域の財政基盤が脆弱にしている。

さらに、治安問題については依然として大きな不安を抱えたまま、五輪・パラリンピックを迎えるこ

とになる。リオでは市と州の警察機能および連邦政府の軍隊が協力してファヴェーラの犯罪組織の掃討に取り組み、これまで警察が介入できなかったモホに常駐の治安警察所（UPP）が設置されるようになった。しかし、犯罪組織を一気に鎮圧するにはいたらず持続的な戦いを強いられている。そうしている間にも政府予算の不足から人員や設備の配置が不足して、警官の士気が低下したり、極度の緊張から抗争中にファヴェーラの住民を誤射する事件が発生したりしている。このため、一部ではUPPと地域社会の軋轢も生まれている。

このようにまだ残された課題は多く、リオが効率的な都市に生まれ変わるまでには、まだ相当の努力が必要であるが、地元では五輪・パラリンピックの開催をそのきっかけにしたいと意気込んでいる。ブラジル経済が浮揚するために、リオの都市再生を好機とすべきであろう。

（はまぐち のぶあき／神戸大学教授）